

かごしま

KOKUHO
KAGOSHIMA

国保

鹿児島県
国保連合会広報誌

2015
No.588

5



【特集】

特定健診受診促進街頭キャンペーンとCM・ポスター・リーフレット制作のお知らせ
健診受診と適度な運動で健康な毎日を



本会広報番組の健康リポーター西上原愛さんも、笑顔でキャンペーンの様子をレポート。本会イメージキャラクター「けんこう坊や」と一緒に盛り上げた

特定健診受診促進街頭キャンペーンとCM・ポスター・リーフレット制作のお知らせ

健診受診と適度な運動で 健康な毎日を

私たち3人も
テレビCMに
出演中!



4ページの
トークン体操を
一緒にしよう!



街頭キャンペー
ンも一緒に盛り
上げました!



鹿児島ユナイテッドFCの選手

自分の体の状態を知るだけでなく、
疾病の早期発見・早期治療につながる
特定健診。保健指導で食事や運
動等の習慣を見直すことで生活習慣
病の発症と重症化予防につながってい
る。本会ではこのたび、健診受診と
健康づくりを目的としたテレビ・ラ
ジオCMやポスター、リーフレットを
制作。一人でも多くの住民に直接呼
び掛けるため、4月24日、街頭キャン
ペーンを実施した。



「健康づくりが若さのひけつ」と話す男性。年齢を感じさせないポーズで「ハイ!チーズ」



各テレビ局の取材を受け、受診促進を呼び掛ける本会事業課の大村保健事業係長



配布されたリーフレットに目をとめる女性

リーフレット配布で受診促進キャンペーンを実施

本県市町村国保の平成25年度特定健診受診率は40・9%。国の定める目標値60%に届いていない状況だ。そこで本会では、昨年引き続き、特定健診の受診・特定保健指導促進の情報発信を行うテレビ広報と連動し、鹿児島市内繁華街で健診の受診を呼び掛け、広報リーフレットを配布。保険者の特定健診受診率向上を目的にキャンペーンを実施した。

4月24日、鹿児島市金生町の大型商業施設付近にて実施した街頭キャンペーンでは、けんこう坊やと「健康が一番」と書かれたはっ

びを着た本会職員と3人の鹿児島ユナイテッドFCの選手が、受診促進を掲げたのぼり旗を持って呼び掛け、メタボリックシンドロームや生活習慣の改善、特定健診について分かりやすく記載したリーフレットの配布を行いながら、住民に特定健診受診の大切さを訴えた。

人通りの多いアーケードでは行き交う住民に「年に1回特定健診を受けましょう」「毎年1回は自分の体の健康状態をチェックしましょう」と呼び掛けながらリーフレットを配布。受け取った人の中には、立ち止まってじっくり見入る人の姿も。時には健康づくりの話も交えながら、一人一人に声をかけ、健診受診の大切さを周知した。

おかげさまで
キャンペーンは大盛況!
毎年1回、
GO!特定健診



今後も県内市町村を訪れ、健康機器による健康測定と併せ受診促進を呼び掛ける取り組みを予定している。

今回のキャンペーンでリーフレットを受け取った人が一人でも多く特定健診を受けることで、受診率向上だけでなく、何より自分の体の状態を知ること健康への意識付けにつながっていくことを期待したい。

各テレビ局も同キャンペーンを取材。本会事業課の大村保健事業係長は「昨年、健診を受けられた方も、現在病院などで治療を受けていらつしやる方も、受診していただきますよう、お願いいたします」と呼び掛けた。

毎年の受診で健康状態を把握

平成25年度市町村国保 鹿児島県の特定健診受診率40.9%に 全国で第10位

本県の特定健診受診率は、特定健康診査・特定保健指導が始まった平成20年度の27.9%から年々伸びており、平成25年度の受診率は40.9%。現在、全国第10位となっている。

また、特定保健指導の終了率についても、平成20年度から全国平均を上回っており、平成25年度の終了率は36.6%。健診受診率と同じく第10位である。

しかしながら、国が定めた目標である特定健診・特定保健指導実施率60%にはまだ届いていない状況である。本会でもさらなる受診率向上に向けた取り組みの支援に努めていきたい。

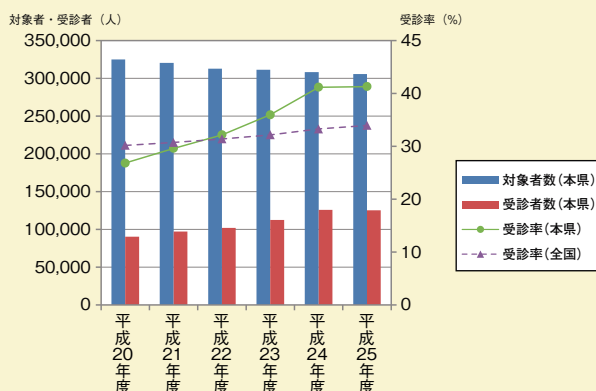
特定健康診査の受診率

年度	対象者数(人) 【本県】	受診者数(人) 【本県】	受診率(%) 【本県】	受診率(%) 【全国】
平成25年度	305,689	125,168	40.9	34.3
平成24年度	308,180	125,790	40.8	33.7
平成23年度	311,166	112,426	36.1	32.7
平成22年度	312,574	102,142	32.7	32.0
平成21年度	320,291	97,242	30.4	31.4
平成20年度	324,789	90,358	27.9	30.9

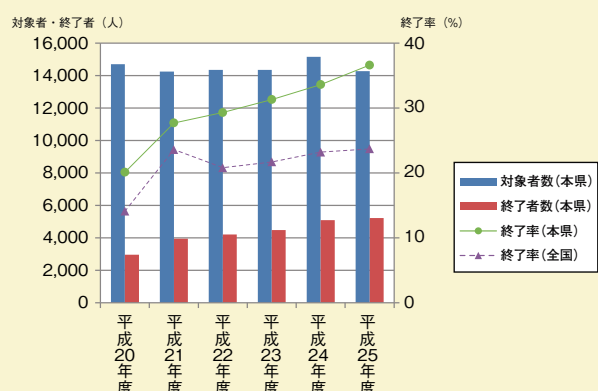
特定保健指導の終了率

年度	対象者数(人) 【本県】	終了者数(人) 【本県】	終了率(%) 【本県】	終了率(%) 【全国】
平成25年度	14,271	5,227	36.6	23.7
平成24年度	15,151	5,095	33.6	23.2
平成23年度	14,343	4,483	31.3	21.7
平成22年度	14,348	4,207	29.3	20.8
平成21年度	14,245	3,946	27.7	23.6
平成20年度	14,692	2,960	20.1	14.1

特定健診対象者・受診率の推移



特定保健指導対象者数と終了者割合の推移



「特定健診の受診・特定保健指導促進」の

テレビ・ラジオCMを放映中



私たち4人もTVCMで
トクケン体操にTRY!
CMは民放4局で放映中!
ぜひご覧くださいね~



MBC 野口たくおさん KTS みえかおりさん KYT 岡本安代さん KKB 竹之内雄太さん

健康は毎日の生活習慣から

本会ではこのたび、特定健診・特定保健指導の受診促進や健康づくりにつながるため、市町村や国保組合の協力のもと、40歳から74歳の特定健診対象者をはじめとするテレビ・ラジオの全視聴者に向けたCMを制作した。

今回は鹿児島県内の各テレビ局を代表する地元人気タレント4人を起用。健診を受けることが疾病の早期発見・早期治療につながることを伝える「特定健診篇」、さらに指導を受けながら生活習慣を見直すことを促す「特定保健指導篇」のCMを、各局2パターンずつ制作。合計8パターンのCMが完成した。その中には昨年誕生したサッカーチーム「鹿児島ユナイテッドFC」の選手や住民、そして本会のイメージキャラクター「けんこう坊や」も登場し、にぎやかな顔ぶれで明るさと元気を表現。鹿児島県民なら誰もが口ずさめる「茶わんむしの歌」にのせた「トクケン体操」をしながら、特定健診の受診を呼び掛けている。

CMは、民放4局およびMBCラジオにて、7月20日まで放映中。ぜひご覧ください。



〈特定健診篇〉



〈特定保健指導篇〉

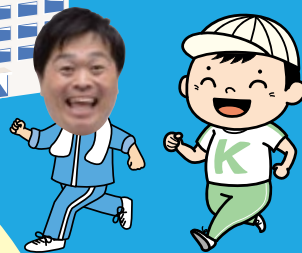
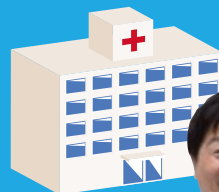
「特定健診」ってなに？

メタボリックシンドローム
該当者や予備群を発見し、
生活習慣病の発症と重症化を
予防するための健診です。



「だれでも」受けられるの？

40歳～74歳の方が対象です。
通院治療中の方も対象です。



「結果」はいつわかるの？

1～2ヶ月後に結果が届き、
あなたの健康状態が
わかります。生活改善の
見直しが必要な方
については、特定保健指導
についての案内が別途
あり、専門スタッフ(医師・
保健師・管理栄養士等)
が支援をいたします。



STOP!メタボ! GO!特定健診

教えて特定健診のこと!

本会で作成・配布した特定健診受診促進
リーフレットの一部をご紹介します。詳しい内容
は本会ホームページにも掲載していますの
でぜひご覧ください。
※検索サイト「国保鹿児島」

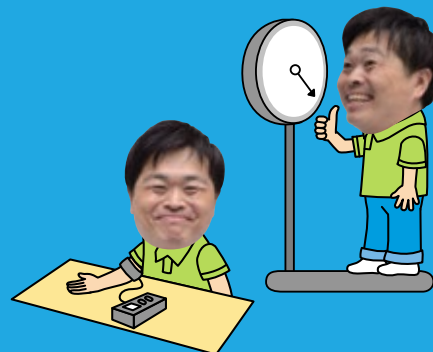
「どんな検査」が あるの？

- 身体測定
(身長・体重・BMI・腹囲)
- 医師による診察
- 血圧測定・血液検査
(脂質・血糖・肝機能)
- 尿検査(尿糖・尿蛋白)

「どのようにして」受けるの？

特定健診を受けるには、**受診券と保険証**
が必要で、医療機関(健診機関)等で受
けることができます。また、受診の際は費
用の一部を負担いただく場合もあります。

パパ、ママ、
健診受けて
これからも
健康でいてね



※詳しくは、加入されている医療保険者(市町村国民健康保険・国保組合・協会けんぽ等)にお尋ねください。

平成26年度 国保・保健・福祉・介護担当者研修会 地域の特性に沿った 保健事業への展開



発症・重症化予防のために、血圧と血糖値がともに高い方への対策が重要と話す長吉技師



脳血管疾患の発症と重症化予防、CKDの予防と発症遅延に取り組むと話す本村技術主査

国保を取り巻く環境

鹿児島市のウェルビューかごしまで平成27年3月3日、国保・保健・福祉・介護担当者研修会が開かれ、効果的かつ効果的に事業を推進しながら日頃の業務に役立てようと、55人の関係者が出席した。

はじめに本会の坪内幹哉事業課長が「市町村を取り巻く環境は、生活習慣病の増加、医療技術の高度化等により医療費は増嵩し、国保財政は一段と厳しくなっている。このような状況の中、平成30年度からの市町村国保の財政運営主体を都道府県とする改革について厚労省は国保法改正案を提示し、改正案のポイントとして保険者は、資格得喪、保険料の徴収、保健事業の実施などの役割を担うとされている。その中で、保険者がレセプト・健診等のデータ分析に基づき加入

生活習慣病対策支援事業への取り組み

平成20年度から医療保険者に義務付けられた特定健診・特定保健指導により、生活習慣病予防対策の重要性が明らかとなった。特に糖尿病、高血圧症、慢性腎臓病（CKD）の背景には、内臓脂肪症候群があり、その対策が病状の進行と重症化予防に大きく影響している。

そこで本会は、医療費適正化に向けた生活習慣病対策支援事業を平成24年度より取り組んでいる。

この支援事業は、医療費の大きな割合を占める生活習慣病を予防し、医療費の適正化に資するため、医療や健診・生活習慣等の現状を詳細に分析し、予防対策を保険者と検討し保健事業計画の策定や実施に反映させていくことを目的としている。

者の健康状態等に応じて行うデータヘルスの保健事業を推進するとされている。国保連合会としても保険者の保健事業の取り組みの一助になればと考えている」とあいさつした。

実施内容は、まず、保険者の医療や健診・生活習慣等に関する検証の支援を行う。具体的には①健診データとレセプトデータの分析から糖尿病・高血圧症・慢性腎臓病（CKD）対象者の現状と背景を保険者と検証②生活習慣病（糖尿病・循環器疾患・腎不全等）の発症に関する生活習慣や地域性を保険者と検証③循環器疾患・腎不全の発症に関する対象者の現状を詳細に分析し、重症化予防対策を保険者と検討④各保険者のデータ分析は保険者が行い、結果を本会へ送信し広域的なデータについては本会が集約を行う。

次に、医療費適正化のための保健事業の策定の支援を行う。具体的には①地域性を活かした生活習



「保険者の保健事業の取り組みの支援に努めたい」とあいさつする坪内事業課長

慣病予防に対する効果的な対策と計画の立案の支援②広域的支援については、生活習慣病予防の取り組みを対象地区の保険者間で共有化する支援を行う。

そして、保険者が行う保健事業の評価の支援を行う。

これらを平成26年度支援として出水市と西之表市の2市をモデル保険者に選定し、2年間事業を実施している。

今回は、取り組みを始めて1年が経過し、出水市と西之表市の担当者が事業を実施して見えてきた課題を分析した結果について中間報告を行った。

分析からみえてきた課題を保健事業へつなげる

事例発表では、国立保健医療科学院生涯健康研究部の横山徹爾部長を助言者に迎え、出水市健康増進課健康増進係の本村頼子技術主査が「ツルが選んだ日本一住みたいまち出水市の健康づくり」医療費分析と重症化予防のための取り組み」西之表市健康保険課国民健康保険係の長吉舞技師が「支援事業を契機とする医療費適正化に向けた生活習慣病対策」と題して発表した。本村技術主査は、分析

をしていく中で見えてきた課題から、脳血管疾患の発症と重症化予防、CKDの予防と発症遅延に取組む必要があると説明。CKD予防の取り組みとして、腎臓内科医から、腎臓の今の状態を自覚してもらおうこと、食事指導を地域で行ってほしいなどのアドバイスをもらったことを紹介した。

続いて事例発表を行った長吉技師は、医療・健診・介護の各データから、高額となる医療の原因は脳血管疾患や心疾患が多いこと、血圧と血糖値がともに高い傾向にあることなどが明らかになったと説明。保健指導対象者を絞り込み、



出水市と西之表市の事例発表を聞きながら、熱心にメモをとる出席者

個別に医療機関の受診勧奨訪問を実施した取り組みについて紹介した。（詳細については9ページ）

横山氏からは医療費の状況を分析するときのポイントとして、「入院と外来を分けて考えるのは非常に大事。外来でリスク因子をしつかりコントロールして、重篤な病気で入院しないようにする場合、例えば外来の高血圧の医療費が上がるとは悪いことではない。それによつて脳血管疾患の入院の医療費が下がればむしろ望ましいことであり、おそらく健康寿命も伸びるし、介護の負担も減るというところにながっていく」と話した。

KDBシステムを活用しPDCAサイクルを展開

事例発表での助言に続き、「KDBを活用したデータヘルス計画について」と題して講演した横山氏は、データヘルス計画は「①健康・医療情報を活用して②PDCAサイクルに沿った③効果的かつ効率的な保健事業の実施を図るための保健事業の実施計画」であると説明し、計画の策定に当たっては、「特定健康診査の結果、レセプト等のデータを活用し分析を行い、事業の評価においても健康・医療情報を活用し

行うこと。また、県やそれぞれの市町村で策定している健康増進計画との整合性に留意する必要がある」と述べた。

そして、「データを分析し、優先課題を見極める能力及び事業実施後の評価を行う能力を養い、PDCAサイクルを展開させることが重要である」と続けた。

横山氏は「健診保健指導事業、生活習慣病対策が上手くできているところは、国保部門、衛生部門の連携（役割分担）ができています。特定健診・保健指導データ、レセプトデータを加工（集計）できる人材は必要だが、KDBシステムの導入がこの壁を取り払ってくれる。ただしデータを読み取る人材は必要で、KDBを見てもすぐには分からないので、訓練をしないとイケない」と話した。



KDBを活用したデータヘルス計画について講演する横山 徹爾

また、KDBシステムを有効に活用するための視点として、「まずどの帳票からどのようなことが分かるのか予習したうえで、取り組む事業にはどの帳票が活用できるかの発想力を高めていただきたい」と呼び掛けた。

地域の特性にあった効果的指導をしてほしい

引き続き、「鹿児島県の循環器疾患の特性と対策」と題して、鹿児島大学大学院心臓血管・高血圧内科学の大石充教授が講演を行った。

大石教授は冒頭「東北地方の病気がだと思っている脳卒中は実は鹿児島病の病気である」と述べた。鹿児島県は、血圧が高くて医療機関で治療している人口10万人当たりの推計患者数は2011年、729人で全国5位、全国平均534人を大きく上回っている。脳卒中は、国内2位の多さである。高血圧の人は心筋梗塞や心不全、脳卒中といった「心血管病」になる可能性が高い。

大石教授は鹿児島の特徴として、「車社会で歩かず、肥満が多い。味付けは甘辛いのが好き。アルコール消費量は全国1位で焼酎を飲む機会が多い一方で、果物の消費が圧倒的に少ない」ことを挙げた。



鹿児島県の循環器疾患の特性と対策について講演する大石 充教授

そして高血圧の予防対策として、「まず何よりも血圧を毎日2回、朝食前と夕食前か寝る前に測る。減塩を心掛け、果物や野菜といったカリウムやマグネシウムなどを多く含むものを食べることで、体内のナトリウムを排泄させてくれて、減塩と同じ効果がある。アルコールは1日に度数25度の焼酎なら0.6合が目安である」と述べた。

また、体重が18歳のときと比較して10kg増えた人は、高血圧になる危険性が2〜3倍高まる。血圧を下げるのに一番効果的なのは減量なので、「1日40分程度、爽やかな汗をかきく程度の適度な運動が良い。減量は1カ月に1kgが適切である」と加えた。

最後に、「地域性や個人の生活習慣を十分に理解して、それにあつたより効果的な指導を心掛けてください」とアドバイスした。



出水市健康増進課健康増進係
技術主査 本村 頼子

「ツルが選んだ日本一住みたいまち出水市の健康づくり ～医療費分析と重症化予防のための取り組み～」

出水市の医療費の状況は、5年間の医療費の推移をみると総額はわずかに増加傾向にあり、項目別では、入院は減少してきているが、外来・調剤は増加している。生活習慣病の医療費で最も多いのは悪性新生物、次いで高血圧性疾患、腎不全となっており、糖尿病の医療費が年々増加してきている。特定健診の受診率は、42.2%（平成25年）で目標にはまだまだ遠いが、僅かずつ上がっている状況である。

モデル事業へは、煩雑になる業務の中で、国保と一緒に課題をとらえ同じ方向を向いた取り組みを行っていきたいとの思いと、健康増進計画の見直しの時期だったことから取り組んだ。分析をしていく中で、2つの課題が浮かび上がった。ひとつは脳血管疾患のSMRが高く特定健診でも脳血管疾患のリスクファクターである高血圧の者が他の地域よりも高いこと、もうひとつは、信憑性は低いが、女性の腎臓病のSMRが高く人工透析患者も年々増加傾向にあること。更に、特定健診結果では、CKD予防のために早期介入の必要性が高い事例がみえてきた。そこで、目標を、

- ①脳血管疾患の発症と重症化予防の取り組み
- ②CKDの予防と発症遅延の取り組み とした。

CKD予防の取り組みとして、腎臓内科医に相談し、腎臓の今の状態を自覚してもらうこと、食事指導を地域で行ってほしいことなどアドバイスもらった。また、事例を経年的に整理し状況を把握、腎臓病の学習会・事例検討会を開きどのように指導していくか学び、訪問指導を行った。今後は、

- ①高血圧予防改善への取り組み（一日野菜小鉢5皿摂取と、減塩について啓発）
- ②CKDの予防と重症化予防
- ③特定健診受診率アップと健診後フォローのあり方検討（医師会との連携）を重点的に取り組んでいこうと考える。

市民の健康づくりに向けての方向性が少し見えてきたので、学習会等を通して保健師のスキルアップもしながら、今後具体的な事業に展開できたらと考える。



西之表市健康保険課国民健康保険係
技師 長吉 舞

「支援事業を契機とする医療費適正化に向けた 生活習慣病対策」

西之表市は、1人当たり医療費が県下43市町村中33位（平成25年度）と平均より低い水準にあるものの、1件あたりの費用：特に入院費が高い傾向にあります。また、特定健診の受診率が県平均（約40%）を下回っており、毎年受診率の伸び悩みが課題となっています。

この支援事業を進めていくうえでは、KDBシステムによる的確な分析に期待を込めて、「的（対象者）を絞った保健事業展開への土台づくり」を目標として設定しました。事業の各回では、保健師や事務職員、看護師や栄養士など、幅広い職種の方の参加で連携を深めながら、地域の特性分析に取り組みました。

医療・健診・介護の各データからは、がんや心臓病で亡くなる方が多いこと、高額となる医療の原因は脳血管疾患や心疾患が多く重複者もいること、血圧が高い傾向にある（血糖・血圧が重複して高い方が県内順位1ケタ）

ことなどが明らかになりました。

そこで、西之表市では、生活習慣病の発症・重症化予防のために設定する保健事業の具体目標を、

- ①脳血管疾患の患者数・医療費を減らす
- ②血圧と糖が重複しているハイリスク者への対策を行う と決めました。

対象者の把握には保健指導支援ツールを活用し、健診受診者における受診勧奨レベルの方を最優先、次に保健指導レベルの方と段階的な絞り込みを行い、その中でも血圧と糖で重複してリスクを持っている方は特に注視しました。

対象者へのアプローチについては、方法や従事者、期間などについて協議を重ね、作成した名簿を基に保健師や管理栄養士が、個別に医療機関の受診勧奨訪問を実施しました。従事者間で名簿データを共有し、訪問記録をそれぞれが確認できるように工夫することで、フォローアップや効果の把握に努めています。

支援事業の2年目に向けては、受診勧奨訪問の評価を行いつつ、分析を継続して地域の健康課題を再整理するよう計画しています。既存の教室や事業を有効的に活用しながら、集団を地域や年齢で絞り込んだアプローチなど、様々な手法を事務職・技術職、課や係の垣根を越えて協力して検討し、より地域に即した保健事業機会を被保険者に提供できるよう取り組んでいきたいと考えています。

「みんなの笑顔と健康を守るために」 地域の力を活かした町づくりを目指す

伊仙町保健センター 保健師

島田 夏美

長寿・子宝の町の大きな 財産は「地域力」

長寿と子宝の双方が、相乗効果をもたらしている伊仙町は、かねてより長寿者の比率が高く、合計特殊出生率に関しては、平成21年の2.42に引き続き、平成26年の2.81と2期連続日本一となりました。

本町は、昔から受け継がれる「子は宝」という考えのもと、地域全体で子どもを育てる風習があり、親戚はもちろん、近所の方が子どもの面倒を見てくれるという地域現象が根強く残っています。実際に地域で子育てする母親の生

の声は、「地域の協力があり、子育てしやすい環境」「地域全体で子育てするという感覚」「身内以外の子どもも自分の子どものように接してくれる」など地域力の強さが子宝につながっているのではないかと感じています。

ある集落では、お年寄りが子どもたちへ実際に田植えと一緒に体験させながら、昔ながらの方法を伝えていくという活動を行っています。子どもから高齢者までが集まる場があることは、大切な伝統を受け継ぐと同時に、高齢者は子どもからエネルギーをもらい、子どもは高齢者を含む地域の方々からの愛情をたくさん受け、大事に

され、この相互作用が長寿・子宝の町の要素の一つではないでしょうか。

そして、平成18年度より高齢者からの温かい一声で、敬老祝い金の一部を伊仙町子育て支援金として、町内に1年以上居住するもので第3子以上出産した方に10万円を支給する制度が導入されました。さらに、平成21年度より支援金の拡充があり、第1子に5万円、第2子に10万円、第3子以上には15万円を支給するようになりました。この制度は、高齢者の子育て世代に対する思いから生まれた制度であり、大いに喜ばれています。



子宝の町伊仙町の子どもたち

そんな中、平成25年度末は産科医確保の問題で、離島の弱みを痛感する状況もありましたが、平成26年度より常勤で2名の産科医が来島し、徳之島でお産できる環境を残すことができました。離島という物理的にデメリットな部分も少なくないですが、この大きな財産である「地域力」を活かしながら、安心・安全な妊娠・出産の実現、子どもたちの健やかな成長発達を促進するために支援し続けて行けたらと思います。

早世対策は若年期からの 健診の受診勧奨

平成20年からスタートした特定



伊仙町保健センターの愉快的仲間達（筆者下段右から2番目）

健診・特定保健指導事業も5年を過ぎ、生活習慣病の予防について関心も高まってきたところですが、平成24年末より春先にかけて、脳卒中などによる早世の状況が相次ぎ、さらに対策に力を入れることになりました。

伊仙町では、平成25年度から法的には40歳からの健診対象者を

国保は20歳から社保は30歳からに引き下げ、若いうちから体を定期的にチェックし、自己の健康づくりを実践できるよう健診料の助成などを行っています。また、保健指導の対象も20歳から受けられるようにし、生活習慣改善の支援を行っております。

今後、積極的に若年期からの健診受診を勧めていき、生活習慣を改善することで脳卒中や心疾患などの重篤な疾患や糖尿病や高血圧症の予防に努めたいところです。そして、子育て世代の健康づくりを支援していくとともに、健康長寿の町づくりを推進し、高騰する医療費を抑制しながら適正医療が実践できる町を目指していきたいと考えております。

長寿・子宝まちづくり応援団の養成

地域全体で健康づくりを盛り上げ、健康長寿の町を推進することを目的に、民生委員・健康づくり推進員・母子保健推進員・食生活改善推進員・地域女性連・スポーツ推進員等の皆様に半年かけて養成講座を実施し、うち受講者78名の方々に修了証書を授与しました。

長寿・子宝まちづくり応援団の方々には、地域での高齢者のサロンへの支援や健診の受診勧奨、認知症の理解や心の健康問題、地域で気になる方々への声掛けなどにご協力をしていただいています。

私は、行政に入って3年目になります。やっと今ある町の姿が少しずつ見えてきたところです。みんなの笑顔を守るために“一人ひとりの健康を守るために”本人はもとより、家族や地域で支え合う共助の精神を大切にし、住民一丸

となって取り組んでいけるような町づくりを目指していきます。



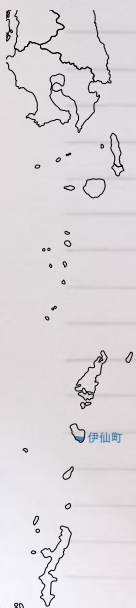
長寿・子宝まちづくり応援団養成講座修了証書授与式の様子

伊仙町メモ

伊仙町は、人口7,056人（平成27年2月28日現在）、鹿児島から南へおよそ500kmにある、徳之島の南端に位置する健康・長寿と子宝の町です。エメラルドグリーン的大海と白い砂浜が広がる美しい自然に恵まれた伊仙町は、長寿世界一としてギネスブックに認定された泉重千代翁や本郷かまと嬢が生まれ育った町としても広く知られています。

また、2009年（平成21年）より、合計特殊出生率が日本一に輝くなど、地域全体で子育てを支えるという習慣が今もお脈々と受け継がれています。

時代とともに人々の暮らしは変わっても、ここには今も昔も変わらない“人々の笑顔”があります。



故 泉重千代翁 120歳



故 本郷かまと嬢 116歳